

書評

## 『現場発 スローな働き方と出会う』

田中夏子・杉村和美著 岩波書店(2000円+税)

中川雄一郎(明治大学/協同総研)

政権与党による「政治のイニシアティブの無責任」についてはしばしば目にすると  
 ころであるが、6月5日に自公連立政権が無  
 理矢理成立させた「年金改革法」は、「無責  
 任」の上に「下品」という言葉が付  
 く。「年金改革法」めぐる今回  
 の一連の状況をマイケル・  
 ムーア監督の言葉を文字つ  
 て言えば、「下品で無責任  
 な自公の年金改革」とい  
 うことになるのか。朝日  
 新聞は見出しでこれを  
 「情報後出し、揺らぐ根  
 幹」(2004年6月11日  
 朝刊)と表現し、「重  
 要情報は後出し、制  
 度設計根拠はあや  
 ふや...。成立した  
 年金改革法は情報  
 隠しのオンパ  
 レードだ。10日  
 には、制度設計の根幹とな  
 る出生率が見込みを大幅に下回って急落  
 したという致命的なデータまで明らかにな  
 った。4カ月がかりの国会審議で議論さ  
 れてきた制度改革の正体は、何だったのか。  
 ...」と怒りを露にした。一般の国民も怒りを  
 露にしているようである。12日のあるテレ

ビ番組が「年金改革法を信用する・信用しな  
 い」というメールによるアンケートを行  
 なったところ、1万ほどの回答のうち94%が  
 「信用しない」と回答し、「信用する」はわず  
 か6%にすぎなかった。

年金改革法が前提とする予測を下回って

「1.29」という戦後最低の出生

率(出生数も最少の

112万4,000人)が

明らかにされたわ

けであるが、多くの

人びとが抱いた不安

は、年金問題に限ら

ず、年金問題に直結し

ている将来の日本社会

そのものでもあったら

う。朝日新聞は同じ紙面

で「自殺者の数は約3万

2,000人で過去最多とな

った」と伝えている。多くの

人びとにとってこれは日本社会

の恐ろしい現実である。最低の

出生率といい、最多の自殺者数

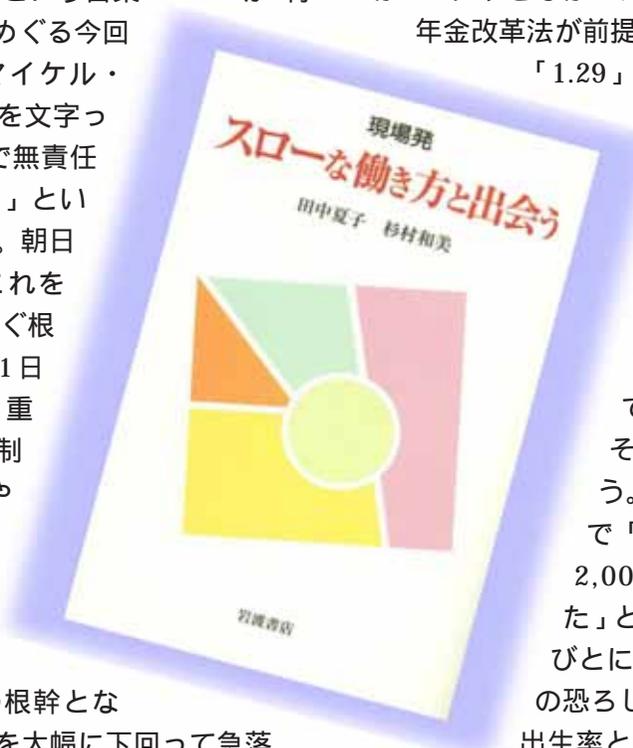
と いい、日本社会はまったく「生き

にくい」社会であることを数字が示してい

るのである。

本書は、このような日本の社会において、

「生きにくさ」あるいは「働きにくさ」と向



き合い、その「生きにくさ」・「働きにくさ」を乗り越え、克服していく過程を実証的に分析し、生活すること、働くことの意味を私たちにやんわりと教えてくれている。

「はじめに」で、著者は、「職場における『生きにくさ』が際立つ今日は、その働きにくさゆえに逆に『働くとは何か』『仕事とは何か』を深く問わざるを得ない時代」だと言い、だが、そうした問いかけを通じて「これまでのような『市場での生き残り』といった発想とは異なるやり方で、仕事に対する展望を切り開いていきたいと願っている」人たちの活動実践を「再現」して、「生きにくさ」・「働きにくさ」の克服を実証していく。このようなストーリーは読む人を引きつけ、その余韻は非常に説得的なものとなる。

では、現代における「生きにくさ」や「働きにくさ」とは何であるのか。

人は誰でも、他者と向き合い、他者が自分をどのように見て、自分にどのように反応するか、また反対に、自分が他者をどのように見、他者に反応し、振舞うのか、という意識をもとうとする。これがいわゆる「自己の認識」である。したがって、「自己の認識」はすぐれて社会的である。社会的であるが故に、「自己の認識」は本来的に貧弱で不完全であってはならない。換言すれば、「自己の認識」がすぐれて社会的であるが故に、「自己の認識」を通して人は誰でも「積極的な市民」になろうと努力し、そうすることが有益であると考えるのである。

「積極的な市民」とは、自治能力と権利に基づく「参加の価値体系」を尊重する市民であり、また「新しい社会秩序の形成」を能動的に社会に働きかけ、そのために活動する市民である。この市民は、支配の力の源泉が何であろうとも すなわち、国家、家族、企

業、夫、宗教組織、民族集団であろうとも他者に対する支配を認めず、平等な個人による自治と平等な権利を擁護する。

「生きにくさ」あるいは「働きにくさ」とは、それ故、人が貧弱で不完全な「自己の認識」を克服しようとするのを妨げたり、また人が「積極的な市民」になろうとする努力を妨げたりするバリアーのことである。これらのバリアーは現代の社会にさまざまな形態で存在する。政治的および社会的な制度・慣行の形態や法律の形態で存在するバリアーもあれば、経済（市場と競争）、教育それに宗教の形態で存在するバリアーもある。したがって、人は、これらの形態のバリアーを切り崩して「積極的な市民」になるために、「新しい社会秩序の形成」を能動的に社会に働きかけ、「生きにくさ」や「働きにくさ」を乗り越えると同時に、「生きにくさ」や「働きにくさ」を「暮らし」と「仕事」と「コミュニティ」を結びつける紐帯に変えていくのである。「スローな働き方と出会う」という本書のタイトルの意味することは、人は「自己の認識」に基づいた「積極的な市民」として「新しい社会秩序の形成」のために活動し、「生きにくさ」や「働きにくさ」を「暮らし」と「仕事」と「コミュニティ」を結びつける紐帯に変えていく、ということである。要するに、生活と労働の面前に存在するさまざまなバリアーが克服されていくプロセスが地方のコミュニティで散見されるが、その様は「暮らしの論理」によって「市場の論理」が規制されるプロセスでもあるのだと著者たちは正しくも捉えているのである。

ところで、『スローな働き方と出会う』の出版を記念して、本誌で座談会が編まれた（本誌 No.140, 2004年3月）。この座談会は、「スローな働き方」のコンセプトがILO（国

際労働機関)の提唱する「ディーセント・ワーク」(人間味のある労働・仕事)のコンセプトとも重なることから、本書がその深部で強調している「労働の意味」を浮かび上がらせることに成功している。著者の一人である田中は、その座談会で「スロー」という発想には2つの方向性があること、すなわち、一方には「人間が大事にされる暮らし方、働き方を構築していこうとする発想」があり、これに対して他方では「スロー」を売り物にする『「スロー」の市場化』を狙う発想があることに注意を喚起しつつ、『「スローな働き方』が、浮世離れしたユートピア的な働き方として世の中の間隙に存在するという形ではなく、社会を規定する市場主義のあり方に変更を迫っていくものとなるには、どうしたらよいか、それを考えることが本書の目的でした」と語っている。田中はまた、農村部の女性たちを中心とした「仕事おこし」、あるいはまた「社会参加」に困難を抱える人たちが切り開く「新しい働き方」、労働者によって再建された職場や職人による「新しい挑戦」、それに「文化と産業を結びつけようとするまちづくり運動」など、「働く現場から捉えた『スロー』の可能性と課題(困難)を描こうと試みた」と述べて、本書の価値を率直に伝えている。

もう一人の著者である杉村も、本書の価値を明らかにするために、こう語っている。「『スロー・ワーク』という言葉にどういう内容を持たせるかについて検討したときに、単なる速度を意味するのではなく、スロー・フード論で謳われている原理を援用して、『質が高く、吟味されていること』、『人びとの暮らしを破壊しない働き方であること』、『社会に向けて発信力のあること』などを含めよう、ということになりました。...直線的

な成長ではなく、「行きつ戻りつできること」が田中さんから出され、それならば、倒産から立ち上げた事業体での働き方も『スロー・ワーク』と言えるのではないかと、ということになったのです。」

この座談会のメインゲストであるILO駐日代表の堀内は、「ILOがディーセント・ワークと言うとき、人びとの『エンパワーメント』にも大きな比重が置かれています。私は、仕事とエンパワーメント、それにディーセント・ワークをどのように結びつけるのか、企業のなかでどんなふうに入びとがエンパワーメントすることができるのだろうか、といつも考えていたのですが、この本はまさにエンパワーメントのこと、人びとの力というものが描かれていて、そこにすごく感銘を受けました」と述べて、ILOの「ディーセント・ワーク」のコンセプトと本書の「スロー・ワーク」のコンセプトには共通する構成要素のあることを示唆した。

「スロー・ワーク」についての三者のアイデンティティにはさらにあるアプローチが用意されていた。『「市場の論理」を規制する『暮らしの論理』』というアプローチである。

(次号に続く)